合唱団ホームページアドレス http://www.wiengifu.org

音楽とは 横への感性なり！

11 月号
2017年11月1日
編集・発行/
ウィーン岐阜合唱団

岐阜の街 ウィーンの如く 音楽し（おとたの）

作:音楽総監督 平光 保

「日本・リトアニア友好の宴」

ウィーン岐阜合唱団 副団長 見田村 勝信

「本当に音楽は国境を越えるのですね！」という言葉が大げさでないくらい、ウィーン岐阜合唱団とリトアニアの合唱団が一つに溶け合っていましたね。リトアニアの第二国歌「緑濃き森林の大地よ」（KUR GIRIA）を合同演奏した時も！ リトアニアのダンスや郡上踊りを会場一杯に繰り広げた時も！ そして最後名残を惜しみながら「さよなら」を歌って彼らを送り出した時も！ 」実際言葉は通じなくても、気持ちは十分通じていました。改めてウィーン岐阜合唱団の底力を感じると同時に、皆様のご協力に感謝します。特に琴やヴァイオリン、チェロなど演奏で盛り上げていただいた方、そしてヌタッフとして協力していただいた皆様本当にありがとうございました。

リトアニアは、日本からはるか数千キロの彼方にあり、人口も 3 百万余り、国土も日本の中部地方位の小さな国ですが、まさに第二国歌「緑濃き森林の大地よ」で歌われる通り、街は緑と赤い屋根に映え、郊外に出れば森と豊かな草原が広がります。さすがに北緯 57 度と、日本でいえばカムチャッカ半島ぐらいに位置するため夏でも 25 度ぐらいしかなりません。逆に冬はマイナス 30 度にもなるそうですが、私には想像もつきません。住んでいた人の話では寒すぎて雪が凍らず、そのため道で車がスリップすることもないそうです。街で最大の行事は 6 月 23 日の「夏至祭」。まさに北の国ならではと言えます。

今回来日した「リトアニア文化指導者合唱団」（United Choir of Lithuania Culture Leaders）その名の通りリトアニアの各州にありますカルチュアセンター(国営)の指導者でなる合唱団で、国内だけでなく、広く海外にも遠征し、リトアニアの民族舞踊などを紹介しています。

彼らの身に着けていた刺繍で飾られた飾りや衣装は、時価数百万円し国から貸与されているということです。リトアニアは大変合唱が盛んな国で、4 年に一度国を挙げて「歌の祭典」が行われます。その祭典を主催するのが、彼ら文化センターです。リーダーで交流会でも指揮をされた Liausa さんは、来年がその年で今から準備を進めているとのお話でした。それは私たちが来年計画しています第 9 回ヨーロッパ音楽友好の旅「リトアニアカウナスで歌う平和の第九」のちょうど 1 か月後、6 月 30 日から 7 月 6 日まで行われます。

このはるか遠いリトアニアと岐阜を結びつけたのは、何といっても岐阜県八百津町出身の外交官、「命のビザ」で有名な杉原千畝氏の縁と言えます。改めてその功績の偉大さを痛感します。当時の緊迫した政治情勢の中で流れに逆らってビザを発行した行為は素晴らしいことだと思うと同時に、その決断力と勇気に感動します。

来年の 1 月 27 日・28 日杉原千畝氏をテーマとするオペラ「人道の桜」が岐阜県主催で行われます。ウィーン岐阜合唱団は、平光先生を中心として、合唱で協力することになり、10 月から練習に入っています。全員の方が参加できないのは残念ですが、気持ちは一つで応援お願いします。

元外交官　杉原千畝氏に思いを馳せ、

今、平和を願う

岐阜本部　アルト　髙橋　奈緒子

爽やかな秋風が吹く９月２５日、リトアニアで合唱指導される３２名からなる合唱団が、東京のイベント出演に続き、杉原氏の縁で岐阜に来られ〝リトアニア文化芸術の夕べ〟が開催されました。リトアニア合唱団は、刺繍の美しい民族衣装に身を包み、舞踏と第二の国歌といわれる「緑なす わが祖国」や太陽への感謝の歌「朝の歌」など、大変伸びやかに、朗らかに、透明感のある美しい響きと迫力ある声量感ある歌声でとても心地よく、我々を魅了してくれました。何よりリトアニアの方々が幸せそうに歌われる姿がとても印象的でした。こちらは、平光真彌先生のヴァイオリン、伴和子先生の独唱、そして、合唱団によるオペラ杉原千畝物語終曲「人道の桜」を披露し、その後の交流会においては、日本民謡、琴、太鼓が披露されお互いに手と手を取り合って歌い、ダンスし踊り（郡上踊り）と（言葉が通じなくても）大いに盛り上がり楽しい会でありました。

私はこの機会に「人道の桜」（オペラ）を初めて知りましたがシンプルな旋律とは裏腹に身震いする程の重みと自分の危険を顧みず、回訓に背いてまで、命のビザを発給するに至る想像を絶する杉原氏の苦慮を思うと胸が締め付けられ、歌う難しさを感じずにはいられませんでした。

そこで、リトアニアに触れながら歴史を少し繙いてみたり、杉原記念館等を訪れて、自分なりに理解する努力をしました。

記念館と人道の丘の静寂な中に身を置いた時、杉原氏の、煩悶の果ての人道主義その温もりを感じました。戦争を知らない私達が戦争を知らない世代や次の世代へ、杉原氏のこの温もりを世界中が平和な温もりに満たされるよう「人道の桜」を心を込めて歌い平和への願いを届けていきたいと思います。

「杉原リスト」がユネスコ世界記憶遺産登録申請中のこの時期に、リトアニアとの交流会という有意義な会に参加させていただき、大変感謝しております。この会の参加にあたり、合唱のみならず、お世話して下さいました役員の方々のご尽力に感謝とお礼をもうしあげます。（原文通り）

命のビザでユダヤ人を救った「日本のシンドラー」杉原千畝。

杉原千畝は、リトアニアに赴任されます。時は第2次世界大戦を直前にひかえた1939年。緊迫の度合いを深かまるヨーロッパで、彼は如何にして6000人のユダヤ人達を救うことができたのでしょうか。

当時の日本は、友好国であるドイツが、ソ連と「独. ソ不可侵条約」を締結したことで、まさに、混乱に陥っていました。そんな中、日本人など一人もいなかった東欧の小国に、なぜ千畝は送り込まれたのでしょうか。 彼に与えられた任務は、何だったでしょうか。 ヨーロッパ全土が、ドイツのナチスの脅威に飲み込まれる中、迫害され逃げ場を失うユダヤ人にとって、最後の望みの綱が 「命のビザ」といわれる日本通過ビザであり、このビザを取得して第三国に逃げる以外に生きる方法はありませんでした。 彼らの運命は、千畝の双肩にかかっていたのです。千畝は、急いで外務省にかけ合いますが、日独伊三国同盟の締結を間近かに控えた日本国からは、むやみにドイツを刺激したくないとの政治事情もあり、ビザの発給の許可は下りませんでした。戦時下という緊迫した状況のもと、日本から遠く離れた異国の地で無断で大量のビザを発給すれば、自分はもとより、家族の身も危険がおよぶ事は必至でしょう。しかしながら、命からがらリトアニアまでたどり着きビザの発給を懇願するユダヤ人達を見捨てる事も出来ず、ユダヤ人の人命救助、かたや外交官としての本国の指示に従うべきとの判断の狭間に立たされ、迷い、苦しみ、悩んだ千畝が出した答えは？

もともと、千畝がリトアニアに赴任した目的は、敵国の情報収集のためであり、ユダヤ人が殺到して来る事は全く想定外でした。このような、外交上の緊急事態では本国に指示を仰ぐのは当たり前のことであり、ビザ発給を断ったからといって、それは誰からも決して責められるものではありません。しかし、遠く離れた極東の地にいる者には分らない、一刻を争うようなひっ迫した状況を肌で感じ、必死で助けを求めて来たユダヤ人達を目の前にした千畝は、家族の理解と後押しもあり、外交官としての自分の立場や外務省の指示よりも、人として、なすべきことを優先させたのでした。

ついに、千畝は、独断でビザの発給を決断しました。その後、千畝の領事館が閉鎖され、外務省本部からベルリンへの移動命令がいよいよ無視できなくなるギリギリのタイミングまで、寝る間も惜しんで必死にビザ発給作業をしました。その数は全てのユダヤ人を助けるには、ほど遠く及びませんでした。千畝たちが、ベルリンに去った後、逃げ遅れた多くのユダヤ人に迫るナチスの魔の手が迫って来ました。一方、運良く「ビザ」を手に入れたユダヤ人も、その全てが無事に目的地にたどり着いたわけではありませんでした。脱出のための唯一の異動手段は「シベリア鉄道」で、ソ連の容赦ない要求がありました。着の身、着のままで逃げてきた彼らが直面した難題は？

法外な運賃でした。ビザの発給を受けたが汽車に乗れず、断念したユダヤ人も多くいたそうです。 リトアニアの千畝から渡された命のビザは、ウラジオストク総領事代理の根井三郎を経て、ジャパンツーリスビューロの大迫辰雄へとつながり、ユダヤ教学者の小辻節三へと届けられました。

そして、無事日本に着いたユダヤ人達は、日本政府により手厚く保護されました。その後千畝は、ヨーロッパから帰国したが、彼は外務省内の冷遇にあい、47 歳で外務省を去ることになりました。その後は、田畑を耕し、奥さんと暫し、幸福な生活を送るのですが、やはり、そうはさせてくれないのが世間です。後は、映画見て下さい。（決して、いい生活を送ったとは、思いませんが。）

「命のビザ映画」鑑賞より平成29年8月記　M.S

薩摩隼人　上山重男氏を悼む

田丸且行先生からのお言葉

平光氏からの電話で氏の訃報を知りました。8月28日、82歳。

暫し絶句。氏とは第九を一緒に聴き、打ち上げ後、同室で明け方まで寝物語をしました。また、電話の声や熱い手紙や、人柄の滲み出るウィーン岐阜合唱団の新聞の文章等が走馬灯のように浮き沈みし思わず熱いものがこみ上げてきました。

突然浮かんできたのは、合者定離（仏教用語で合者定離＝合う者はいつかは離れる）という言葉でした。これは平家物語、枕草子、源氏物語等に通奏低音のように流れる無常観。いつの間にか日本人にも定着している。しかし、フォーレを聞いた後だったので湿っぽい無常観に陥ることなく心を平静に保つことができた。

薩摩隼人とは、鹿児島県人のこと。一義は力強い風貌の持ち主をさす。
しかし、上山氏はご存知のように柔和で、あらゆるものを超越した境地で、まるで観音様のように周りを包み込むような人柄。
このような多面な教養に裏打ちされ、無私でピュアで温かな心で捉える音楽は僕のような中途半端な音楽家気取りには及びもつかない深い音楽の本質を感得されよう。

また、音楽への思慕を生む。音楽への愛に溢れ、それは演奏家まで及ぶ。そこに平光氏とのかけがいのない深い信頼と敬慕、深い人的な交流が生まれる。
出会いの妙、不思議を思う
それにしても、上山氏の晩年の内面を豊かなものにしたのはそうして岐阜で出会った平光、坪内、唐井氏をはじめとした多くの方々との交流の思い出だったと推察出る。

肉体は滅びても氏から頂いた多くの手紙は、僕の心に残り、僕自身の生きるよすがとしての役割を与えてくれる。少しでも音楽との付き合い方を学び取り、氏と出合った事で今後の音楽生活をより実りあるあるもの出来ればと思う。

上山氏から学んだ最大のものは、今振り返ると現世は色々あるけれど「人の善意を信じ、好きになり、愛する事を大切」にしましょう。だったと受け止めている。

闘病も長く色々大変だったと思われるが、奥様によれば「安らかな寝顔」だったとのこと。氏の心をよぎった事柄は想像だが音楽か、関わった人々か、音楽の行く末か、音楽への感謝か、川柳か。
他人には知る由もないが、安らかに天国で音楽に浸って堪能し続けてください。

合掌

田丸且行プロフィール

１９４１年愛媛県で生まれる。愛媛大学、東京芸術大学を経て、財団法人ヤマハ音楽振興会に奉職。その間テキストの開発、製作、指導実務に携わる。

合唱団当時から私たち合唱団を温かく見守ってくださった上山重男先生がご逝去されましたことは、先般の新聞でご案内しました。先生が書かれた記事は以前新聞に連載された記事ですが、今ではこの冊子「上山語録」でしか残っておりません。お貸ししますので是非ご覧ください。また、感想も併せてご寄稿くださいますようお願いいたします。
数も限られております。早めにスタッフの坪内さんまでお申し込みください。

11～1月練習予定

練習時間は18：45～20：45です。(18：30には集合しましょう！！)

月　日	岐　阜	月　日	大　垣
11月　2日(木)	長森コミュニティーセンター	11月　3日(祭)	大垣市南地区センター
11月　9日(木)	**北部コミュニティーセンター**	**11月10日(金)**	**大垣市青年の家**
11月16日(木)	**北部コミュニティーセンター**	11月17日(金)	大垣市南地区センター
11月23日(祭)	長森コミュニティーセンター	11月24日(金)	大垣市南地区センター
11月30日(木)	長森コミュニティーセンター	12月　1日(金)	大垣市南地区センター
12月　7日(木)	長森コミュニティーセンター	12月　8日(金)	大垣市南地区センター
12月14日(木)	長森コミュニティーセンター	12月15日(金)	大垣市南地区センター
12月17日(日)	**岐阜・大垣強化練習　長森コミュニティセンター　14:00～17:00**		
12月21日(木)	**岐阜・大垣合同練習大垣北地区センター18:30～20:00 オケ合わせ**		
12月23日(土)	**岐阜・大垣強化練習　岩野田北公民館　14:00～17:00(最終確認)**		
12月24日(日)	**"第九"演奏会本番　長良川国際会議場メイン会場　14:00 開演**		
1月11日(木)	長森コミュニティーセンター	1月12日(金)	大垣市南地区センター
1月18日(木)	長森コミュニティーセンター	1月19日(金)	大垣市南地区センター
1月25日(木)	**岐阜・大垣合同練習　長森コミュニティセンター　18:45～20:45**		

"真由ちゃん響室"　発表会のご案内

伴　真由子先生の個人レッスンを受けている方の発表会が下記の通りあります。
ウィーン岐阜合唱団の団員11名　他3名が日頃の練習の成果をソロやデュエットで発表します。皆様の温かい拍手で応援してやってください。尚、真由子先生の歌もあります。お楽しみに！！

記

- **日　時：11月19日(日)13:30 開演(13:15 開場)**
- **場　所：大垣シューベルトホール**

大垣市安井町3-28　TEL (0584) 82-6575

米　寿

88歳になった。60歳の還暦から、5回目の人生の節目を迎えたことになる。
書店の前を通ると、つい足が止まる。高齢者向けと思われる本が、やたらと目につくからである。「元気なお年寄りが増えたからだ」と、余計なことをつぶやきながら、とどのつまりは、本を手にして帰る。戦前に生まれ、戦中に育ち、戦後に生きるというめまぐるしい時代を体験した昭和ひとけた生まれ。「一番割を食った世代」と、世間から同情の目を向けられたこともあったが、これでよかった。これまで歩んできた道のりには、それなりに精がだせたと思うことにしている。
久しぶりに電車に乗った。向かい側の座席の14のうち、13人がスマホとにらめっこしている。アナログ人間には、どうにも異様な光景に移る。小学生のあたりからこうだとしたら、ちょっと気になってしまう。
「年はとっても、オシャレはしろ。よく歩け、何事にも好奇心を持て」今は亡き先輩の言葉である。間に合わないかもしれないが、耳にはずっと残しておくつもりでいる。「終わりよければ、すべてよし」という。物事、そう都合よく運んでくれるとも思えない。そうだ。それはエンマさまに任せよう。

(心のメッセージより)